市役所前のブックセンタークエスト小倉本店に設けられた特設コーナー。「DOBOKU」の文字が目を引く表紙は、何冊か横に並べるとトラス上部工のように見える
（写真:右ページも三上 美絵）

市を挙げて土木を観光資源化

「聞いてっちゃ!」、土木施設の情報誌が大好評

「土木施設やその役割にもっと興味を持ってもらいたい」。こうした狙いで北九州市がまとめたガイドブックが、評判を呼んでいる。土木部門出身の職員が“足”で集めた情報をもとに、企画から編集までほぼ手作りで制作。取り扱う地元書店には、全国から注文が舞い込んでいる。（本誌）

書店の入り口で、棚の冊子が客の目を引く。真っ赤なトラスを描いた表紙は、横に並ぶとまるでダイナミックな橋の上部工のよう――。

一見、旅行ガイドブックのように見えるこの冊子。北九州市が、市内の土木関連施設などを“観光スポット”として紹介するために、この春出版したものだ。その名も「DOBOKU思わず行ってみたくなる130選」。市制50周年事業の一環で、同市の職員が企画から出版まで、全てをほぼ手作りでまとめた。

中身でまず目に入るのは、表紙のモチーフでもある若戸大橋。1962年の完成当時は「東洋一の夢の吊り橋」とうたわれ、今でも地元で愛される土木施設だ。そのほか、門司港駅や東田第一高炉跡など産業近代化に貢献した歴史的施設、夜景の美しさで若い世代に広がってきた北九州工業地帯など、幅広く取り上げている。有名な施設だけでなく、人目につかない地下調整池やごみ処理施設の構築方法、機能など、“玄人受け”する情報も盛りだくさんだ。

「『機能性』を重視し、工場や溶鉱炉なども含めて公益的な施設を幅広く集めた。土木技術が暮らしを快適にしていることに興味を持ってらうことが狙いだ」。担当した北九州市建設局総務部の岩下和弘事業調整課長は、こう説明する。

「聞いてっcha」と題したコラムで、技術的な背景や豆知識、見どころなどを紹介。右は、綴じ込み付録の栞とポストカード。1冊96ページで税込み500円(資料:北九州市)

北九州市建設局総務部の岩下和弘事業調整課長(左)と事業調整課の矢野やよい氏(右)

隠れた魅力を市民に「蔵出し」

1年半をかけた制作作業の全てを手がけたのは、岩下課長と同課の矢野やよい氏。2人とも元々は土木部門の技術者だ。各部署に照会して候補施設を集めるところから始め、担当部署に適切な写真がない場合は、自ら撮影に現地を足で回った。

特に工夫したのは、現場の担当者だけが知る「秘話」を発掘すること。「例えば若戸大橋では、144万本ものリベットが使われており、補修でも、技術継承の点からあえてリベットを使い続けている。当事者だからこそ知る“面白さ”を意識して集めた」(矢野氏)。冊子のサブタイトルに入れた「蔵出し」という言葉は、矢野氏が数日間悩み抜いて絞り出したキーワード。伝えたい思いを一言で代弁する言葉だ。

冊子の販売は、市役所前の書店と地元の大学生協に委託。30～50代の社会人に売れていて、地元企業のまとめ買いも多い。書店の担当者は、「全国から注文の依頼がきて驚いている」と話す。初版2000部の売れ行きは好調で、市はすぐに3000部を増刷。観光担当部門も連携して、旅行事業者向けに「ドボクスポット」を巡るツアーを実施するなど、市を挙げた土木のPRに本腰を入れている。

(三上 美絵=フリーライター)